

2023年度 小・中学生

「いのち」の 作文コンクール



作品集

—— さくひんしゅう ——

公益財団法人 JR-West Relief Foundation
JR西日本あんしん社会財団

JR西日本あんしん社会財団 2023年度小・中学生「いのち」の作文コンクール 作品集

公益財団法人 JR-West Relief Foundation
JR西日本あんしん社会財団

ごあいさつ

公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団

理事長 来島達夫

当財団は2005年にJR西日本が惹き起こした福知山線列車事故の反省から設立され、「いのち」や「こころ」、「安全」をテーマに様々な活動を行っております。

本コンクールは、作文を通じて「いのち」の大切さを考えていただくとともに、それにより「いのち」を大切に
する安全で安心できる社会づくりにつなげていきたい、という思いを込めて、将来を担う小・中学生の皆さんを対
象に近畿2府4県で募集しており、今回で5回目を迎え、5千余の応募をいただきました。

身近な「いのち」のはじまりや終わりに触れた作品に加え、今回は学校生活で感じる生きづらさや生き方を思い
悩む中で家族や友人との会話をきっかけに生きることを見つめ直した作品が多かった印象を持ちました。

「いのち」という、容易にはかけないテーマではありますが、みなさんが真剣に向き合い、考えていただいている
からこそ、今回もまた、心に訴える数多くの作品に出会うことができました。皆さんのいのちの尊さや生きること
への想いが表現されており、主催者として大変嬉しく思います。

コンクールの実施にあたり、ご指導いただきました学校関係者の皆様、並びにご家族の皆様ほか、多くの方々か
らのご協力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

本作品集への掲載は、ご応募いただいた作品の一部ですが、小・中学生の皆さんはもちろん、広く多くの方々に
「いのち」について考えるきっかけにさせていただければ幸いです。

目次



CONTENTS

- いのちの作文大賞(4名) 4
- 優秀賞・選考委員特別賞(6名) 22
- 優秀賞(20名) 34
- 入選(70名) 58

- 選考を終えて 64

いのちの作文大賞 (小学生 一・二年生)

わたしとおじいのリモコン

大和郡山市立治道小学校 二年一組 東田 美紗

たのしい夏休みがはじまった三日後、おじいがなくなった。

わたしのおじいは、びょう気で手足がわるく歩く時はつえをつかっています。一日のほとんどをテレビを見ながらすごしていました。

「こら、みさテレビのリモコンどこやった。」

とおじいがよく言っていました。

なぜかと言うとわたしはよくおじいのテレビのリモコンをかくしていました。見たいテレビがある時、おじいは見せてくれる時はすぐ見せてくれるけど見せてくれない時はなかなかうごけないからあきらめてねていました。わたしはそーといって好きなテレビを見たりしていました。おじいもまけずにリモコンをかくします。わたしはなきます。そしたらおじいは、見せてくれます。おじいはわたしにあまかったです。

それから、わたしとおじいのリモコンかくしはずっとつづき、おじいがびょう気で入いんとするとわたしは

「やった。好きなテレビ見れる。」

とよろこんでいました。

おじいがたいいんするとまたリモコンかくしがはじまりました。びょう気で何回も入いんをくりかえすおじいは、とうとういえにはかえってきませんでした。

あつい夏がはじまったころ、わたしはおじいさんに会いにびょういんに行きました。会いに行くとおじいちはよろこんでいっぱいしゃべってくれました。それがおじいとのさい後でした。今はすきなテレビを見ているとすこしさびしい気もちになります。

講評

テレビのチャンネル争いを繰り返していた「おじい」と私。「おじい」が入院し、「やった」と喜ぶも、亡くなってしまった今はテレビを見ると当時が思い出され少し寂しく思う。「おじい」も負けじとリモコンを隠す様子など「おじい」が目の前に見えるかのように生き生きと描かれ、テレビとリモコンを通して、亡くなった「おじい」への強く慕う想いが感じられる。感じるままを書いた最後のシーンの表現も大変印象的で高く評価できる。



カナヘビの冬みん

大津市立下阪本小学校 三年E組 竹本 雅隆

秋にカナヘビをつかまえた。ぼくは「家でかいたい。」と、お父さんに言った。生き物をかうことは大へんなことだと言われたけれど、どうしてもかいたいとおねがいました。

カナヘビをゲージに入れて、つかまえたバツタをいれた。カナヘビはすばやい動きで、バツタのおなかをパクリとかんで食べた。まるできょうりゅうみたいでかっこいい。げんかんの金魚の上がカナヘビのスペース。

秋の終わり、えさのバツタが少なくなってきた。カナヘビのすがたが見えなくなった。お父さんに「しんだのか、冬みんしたのか、分からない。」と言われて、かなしくなった。冬みんは、さむくなるとえさもへってしまうから、冬の間はねむって、春をまつことだ。冬みんはいのちがけで、しんでしまうこともある。今生きているかたしかめると、もし冬みんしていたらおこしてしまう。春までそっとしておくしかなかった。ぼくは、カナヘビが生きていてほしいとおもった。

二月に大へんなことがおこった。カナヘビが動いている。うれしかった。でも体は半分くらいほそくなって、ヒヨロヒヨロだった。冬みんでたくさんエネルギーを使っていた。カナヘビを守ってあげないといけないと思った。けれど、エサをさがしに行っても、クモしかいない。

びわこはく物館の金お先生に聞きにいった。「やせすぎてあぶない。」と言われた。カナヘビは生きたエサしか食べない。クモだけでは、えいようにならない。ペットショップのコオ

ロギSサイズをすすめられた。ばくのおこづかいで買えなかった。

ゆかだんぼうのある場所にうつして、がんばってクモをつかまえて、カナヘビにあげた。

なんとか冬みんからおきたカナヘビに生きてほしかった。

そして春になった。カナヘビは、生きている。にわでちがうカナヘビを見つけた。あのカ

ナヘビも冬みんして、冬をのりこえたんだ。

冬みんは、たいへんだけど、生きることがすごいことだと思った

講評

秋に捕まえ飼いだめたカナヘビ。虫の少なくなる秋から冬をいかにして越させることができたかという数カ月わたる様子を書きあげた迫力ある作品である。あまりのやせ方に博物館に聞きに行ったり、エサにすすめられたコオロギがお小遣いでは買えないので、頑張ってクモを捕まえるなど、一生懸命カナヘビの越冬を見守る様子を丁寧に表現。お腹をばくりと、まるで恐竜みたいに等の小学校中学年らしいワンパクで天真爛漫な描写も好感が持てる。



心の穴の病院

京都市立錦林小学校 五年三組 林 優陽

あなたは、心に穴が空いたことがありますか？空いたことがないと思っても、大事なおもちゃが壊れた時や、ケンカをした時など、さみしい気持ちや悲しい気持ちになったときに、心に穴が空いてしまうと私は思います。私が、私の一番大きな穴が空いた事に気が付いたのは、父が死んでしまって、一週間ほどたった頃です。亡くなってすぐの頃は、学校でもいつものように過ごせていましたが、少し経ったら、学校でも、家でも、友達と遊んでいても、父が頭の中にいて、楽しい気持ちが消えてしまう様になりました。三年以上経った今でも、私の心の穴は空いたままです。

父が亡くなってすぐ、コロナウィルスのために、緊急事態宣言が発令され、好きだった芸能人の人が感染して、亡くなってしまったり、自殺をしてしまったりした時も、父の時よりは小さいけれど、沢山の穴が空くのを感じました。

私は、今は元気で、楽しく過ごしていますが、穴は半分も埋まっていません。でも、心に空いた穴の周りが広がったので、穴の大きさは小さく感じます。心を広くできたのは、私のことを心配してくれて、沢山話を聞いてくれた人や、一緒に過ごしてくれた人がいたからです。私自身も穴が空いている人を見つけたら、声をかけて、私も話を聞くようにしたら、相手の穴が埋まったような気持ちになり、自分の穴まで埋まった気がしました。

コロナで出かけられない時は、いつもはテーブルで食べるご飯を、寝室でゴロゴロしながら食べたり、お母さんのリモート会議にこっそり参加したり、テーブルで卓球をしたり、限

られた中でもいつもはできないことをなるべくする様にしました。そして、コロナが落ち着いてからは、母と色々な所に出かけて、会いたい人に会って、多くの経験をする様になると、穴の周りがさらに広がって、穴が空いていても、心から楽しい気持ちで過ごせるようになりました。

もし、そんなことができない人がいるなら本当に少しでいいので、いつもと違うことをしてみたらいいと思います。それで、失敗しても、生きていなければできない失敗で、その分きつと、心が休まったり、広くなったりすると思います。穴が空いた事は、辛いけれど、少し時間が経つと悪いだけの経験ではなくなることもあると思います。

私は、いのちは心がないとならず、心はいのちがないと思いません。だから、私は将来病院を作りたいと思っています。大切な人を失ったり、病気になったりして心に穴が空かないようにしたいです。穴が絶対空かないようにはできなくても、穴が空いても大丈夫だよ、と支えてあげられるような、いのちも心も支えられる病院にしたいと思っています。

講評

父の死により空いた心の穴。心の穴という、自分にとって大切な表現を繰り返し用いることで自らの内面を描きあげるとともに、いつもと違う経験や人への声かけの実践により心が成長していくという外面も描き、それらが相互に関連し、心の穴の大きさの感じ方につながっていることを表現している。周りが広がったから心の穴が小さく感じるとの捉え方が素晴らしい。また将来の夢に至るまで「心の穴」で一貫させていることも印象的である。

いのちの作文大賞 (中学生)

これが私のいのち

私立須磨学園中学校 三年三組 平見 奏子

寒い。あの日は、地面に霜柱が立つそんな日だった。当時、小学三年生だった私は手のひらで温めることしかできなかったあの時の無力さを忘れはしない。飼っていたハムスターに腫瘍ができ、みるみるうちに弱り、やせ細り、歩けなくなり、目も開かなくなった。息が絶え絶えになって弱っていく様に、私はただ手のひらの上のせて何度も何度も名前を呼び続けることしか出来なかった。

「キイツ。」

最期に精一杯の声で挨拶して、ハムスターは永遠の眠りについた。涙が止まらなかった。何で、どうしても、あんなに元気だったのに。悲しみとは違う説明しがたい怒りにも近い感情が襲い掛かり、ただ私は泣いた。その後、裏の畑の春になると菜の花が咲き誇る場所にハムスターを埋めた。

「キー君と同じ色の花が咲くから、キー君は毎年帰ってくるんだよ。」

と、母と話したことを思い出す。死んだらどこにいくのか、肉体は朽ち果てて土に還る。では、自我はどこにいつてしまうのだろうか。消滅して無くなってしまふのだろうか。

あれから五年半もの月日が流れた。私は今、病院のベッドの上にいる。腕は長期間の点滴投与でパンパンに腫れて感覚が無かった。ハムスターの死後、今度は私が病気になる、入院を繰り返していた。薬の副作用と戦い、リピート機能を誰かが押しているみたい、そんな毎日だった。全身にできた湿疹が膿み痛くて仕方なかった。髪が抜ける。それに加えてムー

ンフェイス。鏡を見るのも怖くなった。死にたい、消えてしまいたい、もう楽になりたい。波のように繰り返してやって来る感情に押しつぶされて、私の世界から色が消えた。全てが灰色みたいに見えた。

そんな時、病院側の事情で病室を移動することになった。

「まあ、孫みたいなのがいるわ。」

新しく同室になったおばさんに覗き込まれた。動くことができず、ベッドの上からお菓子を差し出してくるおばさんもいる。看護師さんに隠れてこっそり間食しているおばさんもいた。同室となった三人のおばさんの自由さと明るさにギョツとした。ここの科に入院しているってことは、簡単な病気ではないはずなのに、変だ。私はどう接して良いのか分からず戸惑ってばかりいた。

「私はね、社交ダンスをしていたのよ。退院したら衣装を着なくちゃいけないから運動しなくちゃね。」

「私は、退院したら思いっきり髪の毛を洗うの。そして居酒屋に行ってお酒を満足いくまで飲むの。」

「孫が大学に入ったから一緒にフレンチを食べに行きたいわ。」

点滴につながれて、満足に歩くこともできないのに、三人はいつもキラキラとしていた。点滴を片手に、WBCの中継を悲鳴をあげながら応援した。三人の生きようとする力に圧倒された。なんて強い、生き抜く強さだろうか。肉体が土に還るその日まで全力で生き抜くということはそういう事なのか。話す、笑う。灰色だった私の世界に少しずつ色が戻ってきたのはこの時からだった。

夏が来て、私は外に出られるようになった。太陽の下、暑くて滝のように流れる汗が、ありがたいこと、幸せなことだと気付いた。病気になるなかったら気付けなかったことだと思ふと、全ては意味のあることだと感じる。悲しい出来事も、嬉しい出来事も必然なのだ。私にとって「いのち」とは試練の連続だ。それでも生きるのだ。等しい「いのち」など、どこにも存在しない。一人ひとりの生き様が、個の「いのち」となるのだ。時々、私は夜空を見上げる。いつか自我が消えて無くなったとしても、星の輝きのように何億年経っても光を届けられるような生き方をしたい。これが私のいのちだ。

講評

ハムスターの死と、それに続く自分の入院。辛い日々で死も意識するも、途中から同部屋となった「おばさん」達の生きる力にいのちを考え直す。「おばさん」それぞれを個として鮮やかに描き切り、自分の周りで代わる代わるに発せられるパワーに、ただ圧倒されるしかなかった様子が目に浮かぶ。「おばさん」達登場以降のスケールの広がり、5年半前からの時間経過とそれに伴う状況の変化が作品に一層の深みを与えている。



もうろう命にありがとう

姫路市立旭陽小学校 二年一組 鵜飼 一有

「なにが食べたい？」ときかされると、ぼくはかならず「とりのからあげ」とこたえます。たん生日も、こどもの日も、クリスマスも。ぼくはとりのからあげが大好きです。

そんなぼくがシヨックをうけることが、きよ年のクリスマスにありました。スーパーへ夜ごはんの買い物にお母さんで行った時、からあげ用のとり肉をさがすぼくの目に、ずらりとならぶクリスマスのローストチキン用の「とり」の肉がとびこんできました。それはほとんど「とり」のかわたちをしていました。スーパーでこんなにもこわい思いをしたのは、はじめてでした。ぼくが大好きなとり肉は、「とり」の肉で「とりの命」だったのだということが、その日のぼくの心をずんとおもくしました。

ぼくの家の庭にはメタセコイアの木があり、一年をとおしていろいろな命をみるができます。ハトが巣を作り、を大きくしてくれていることを時々は思い出し、残さず、もうろう命にありがとうの気持ちをわすれず食べることが今のぼくにできることだと思えます。

ひなが生まれたことにみんなでよろこんだのに、カラスにとられからっぽの巣をみて泣いたことがあります。セミのよう虫がひっ死に木をのぼり羽化するすがたを応えんした次の朝、うまく羽化できずに死んでしまい、木の下でアリにかこまれるべつのような虫を見つけ泣いたこともありました。どんな時も、生まれてくる命はまわりをあたたかい気持ちにし、死んでいく命を思うとなみだが出ました。そして生きている時は楽しいことがたくさんありますようにとねがいました。「人間も動物も虫も、みんな命は大切なもの」と思うぼくは、食べられるために生まれてくる命があるということ、ぼくも命をもらっているということに気がついて頭の中がごちゃごちゃになりました。

「なにが食べたい？」ときかされると、やっぱりぼくは「とりのからあげ」とこたえます。でも、たくさん命がぼく

講評

店に並ぶ「とり」の姿のままの鶏肉を見て、大好きな唐揚げは「とり」の命をもらっていることを改めて知る。メタセコイアの庭木の下で繰り広げられる昆虫たちの生死の連鎖の様子に、「いのちは大切なもの」と思いつつ、食べられるための「とり」の命のことなどを考えると「ごちゃごちゃする」と綴る。わからない状況をありのままに伝えつつ、自分に出ることを素直に表現。最後に改めて冒頭のフレーズを書くなど、構成にも工夫がみられる。



たいせつないのち

たつの市立小宅小学校 二年 山口 優依

一年生のとき、おとうさんがしんでしまいました。ガンという病いよきでした。おとうさんはなにもわるいことはいしていません。おとうさんがいなくてかなしいです。もつとあそびたかったです。わたしがつくったごはんをたべてほしかったです。おてつだいをしておとうさんにほめられたかったです。「大きくなったな」とだきしめてほしいです。わらったかおが見たいです。おとうさんとどと会えないし、お話もできないからさみしいです。

おとうさんは、「もつと生きたい」と言っていました。おとうさんもわたしたちとはなれたくなかったんだと思います。生きたいとつよくおねがいをしても、しんでしまいました。さいごに「いたい」と言って、しんでしまいました。じぶんが思うように、生きられないし、しねないんだと思いました。おとうさんは、いたくてもさいごまでが

ばって生きていてくれました。おとうさんもつらかったことでしょう。わたしが生まれたとき、おとうさんはなくてよろこんだそうです。わたしをたいせつにぞだててくれたおとうさんが大すきです。わたしは、わたしのいのちをたいせつにします。おとうさんがかなしまないようにしたいからです。おとうさんが、いのちがたいせつだとおしえてくれたからです。

講評

昨年、病気で亡くなった父。父とやりたかった、父にやってほしかった、父にされたかったなどの連呼や、父は何も悪いことをしていないのになどの心からの訴えから、父を亡くした悲しさが、読む者に非常に強くストレートに迫ってくる。深い悲しみに共感せずにはいられなくなる作品である。父が自分をいかに大切にしてくれたかにも触れ、父が大切だと教えてくれたいのちをしっかり生きたいとする決意も印象的である。



今ぼくが思うこと

姫路市立城乾小学校 六年三組 永井 蒼大

初盆とは故人が亡くなり四十九日が過ぎ始めて迎えるお盆のこと。お盆は亡くなった方が家族の元へ帰ってくる日といわれていて故人を供養する上でとても大切な日と辞書にあります。この夏、ぼくはひいじいちゃんの初盆を迎えました。

突然、ひいじいちゃんが死んだと連絡があったのは昨年末のこと。九十六才だったじいちゃんは、一人暮らしで何でもできる自慢のじいちゃんでした。足を悪くしてからはぼくが車いすを押ししたり、手を支えて歩いたり。「そうた、そうた」と本当にぼくをかわいがってくれていて、数日前に会った時もいつもと変わらず元気でした。白内障の手術をしてから眼鏡がいらんようになったと何度も自慢してうれしそうだったじいちゃん。連絡を受けて直ぐにお母さんとじいちゃんの家に行ったら、布団の上ですやすや寝て

いるみたいなじいちゃんがありました。ただただ寝ているだけみたいなのに、呼びかけたら今にもパチッと目を開けてくれそうなのに：身体がツーンと冷たくて微動だにしない、でもそこら中でさっきまでじいちゃんが生きていたんだと感じる生活のにおいで、胸がギューッと苦しくなり、一滴流れた涙が、次から次へとあふれて止まらなくなりました。現実を受け入れられないっていう言葉を耳にするけど、拒絶、否認、あの夜のぼくはこの言葉のような状態だったと思います。

日本には故人が安らかに成仏できるように段階をおった法要があります。初七日、四十九日、百か日。おそう式の頃はさびしくて、悲しくて、泣いてばかりだったぼく達。でも法要を行い時間が経過する中で、少しずつ、みんながじいちゃんの事についてぼつぼつと思い出を話すように

なっていました。家からは軍隊にいた時の海兵姿のりりしい写真やひいおばあちゃんと一緒のすました写真、かわいがっていた犬のグッズや、ぼくが送った年賀状、かさかさする手にぬっていたお気に入りのクリームなど色々なつかしい物も出てきて、どれをとっても色んなエピソードがありました。

先日迎えた初盆。遺影のじいちゃんは変わらず笑っているのに、お経を聞きながらぼくはやっぱりさびしくなりました。ただ、いつものおじいちゃんの話になり、お盆だからそばにいるのかもしれないなあと家族で話していると、ふふっと笑ってしまうぼくもいます。

ひいじいちゃんが死んでしまつてつらい気持ちは今も変わりません。ただ、拒絶していた頃とはちょっとちがいます。法要を行う過程で、ひいじいちゃんを大切に想う人達が集まり、なつかしみ、思い出を語り合う事で悲しみを共有し、その悲しみが少しずついやされるのかも。供養の過程が残された家族の心のケアにもなっているのかな。初めての初盆を振り返りながら、今ぼくはそんな事を感じています。

講評

曾祖父の死。直後の言いようも無い悲しみの状態を、様々な描写を使いながら丁寧に表現しつつ、辛い気持ちは変わらないものの、時間の経過とともにその悲しみが徐々に変化していくことを、初盆に至るまでの法要ごとの供養の過程とともに綴る。「ふふっと笑ってしまう僕」という表現など、自らを非常に客観的に見つめることができているのが特徴的であり、全体の構成を含め上手にまとめられた作品である。

優秀賞・選考委員特別賞

いのちの記憶

大津市立打出中学校 一年三組 紀伊 埜乃花

時々、小さな頃のホームビデオを見ることがあります。そこには私が生まれて、だんだん大きくなって、話せるようになり歩けるようになっていく様子が映っています。旅行などの特別なイベントの映像ではなく、日常のほんのひとコマがたくさん詰まったホームビデオ。まだ小さかった兄や父も母も、みんなとても楽しそうで、ついつい見入ってしまいます。今、いつの間にか成長した私は、あの頃のようには幸せな瞬間ばかりではなく、傷つくことも悩むこともありませんが、生きることは楽しいこと、生きることは幸せなこと、という揺るぎない基礎の部分が心の深い部分でいつも自分を支えてくれているように感じています。テレビで、記憶にも残らない幼い頃をどう過ごすかが、その先の人生に大きな影響を与えると聞いていました。児童心理学の先生が言うには、無意識的に学んだものは絶対的で、後

になってから無意識の領域に入り込み意識を書き換えるということとはとても難しいのだそうです。だから、幼い頃に楽しい思い出をいっぱい作って毎日いろいろな体験をして笑って過ごすことが、その先の人生を生きていく上でとても大切なのだと言っていました。私は幼稚園に入る前に父を亡くし、父の記憶はほとんどありません。ホームビデオに映る父が私の中の父であり、残された父の写真や映像と、母や兄から聞く話だけが父のことを知る手がかりになっています。時々会いたくなります。お父さんがいたらどんなだっただろうと想像します。どんな言葉をかけてくれただろう、どんな毎日だっただろう、と。でも不思議と悲しくはありません。私は特別自分を強い人間だと思いませんが、弱くもないと感じています。今毎日満ち足りて笑って過ごしているのは、無意識

の中で過ごした毎日があのホームビデオそのままに幸せだったからに違いないと、確信しています。反対に、両親が揃って生きていても心が通わず満たされない、家族といっても幸せを感じられないという話もよく耳にします。いのちって不思議だなと感じます。ここに今ないいのちでも、しっかりと私のいのちに繋がっています。

父を亡くした私は、これから先も幾度となくいのちについて考えて答えを探していくでしょう。悲しい思いもするかもしれませんが。でもきっと大丈夫。記憶にはないいのちの記憶がこの先も私を支えてくれると信じています。

講評

幼少期の何気ない幸せだった日々を過ごしたかどうかその先の人生にとっても大切だと言う。幼稚園入園前に亡くなった父を交えた楽しい日々だったことが具体的な記憶としては残っていないが、いのちの記憶として今も自らを支えていると綴る。具体的エピソードはないものの、確かな絆が感じられ、文中の端々に優れた表現があることもあいまって、読者にしっかりとした思いを伝えきる力強さがある作品である。



二人分のいのち

大津市立打出中学校 二年七組 藤原 瑠生

二つ年上の姉がいる。僕とは性格が全く違って、自分のことは自分でできるタイプの人間だ。ただし、それは家の外のことであり、家では僕と同じようにだらしがない。そんな姉とは小さい時からずっと仲が良い方だと思うし、色々な面で姉を打ち負かすことはできない。姉が生まれた時の話を母から聞いた。出産が進まなくて、帝王切開になったこと、その瞬間に父が間に合わなかったこと、生まれてすぐの姉は父にそっくりだったことなど。色々と大変そうだなとは思ったが、自分の誕生にはもつと大変で、想像もできないようなドラマがあった。

母は不妊治療をしていたので、何度も注射をしに病院へ通ったらしい。そして僕を授かった。それがわかったとき、嬉しい気持ちだけでなく、不安な気持ちが大きすぎて、病院で泣いたと聞いた。なんと、母のお腹の中には、僕とも

んだ。」と言って身を引いてくれたのだと思う。この三センチが僕である。

これだけでも十分に感動的なドラマだが、僕の胎盤は姉が産まれるときにできた傷跡にひつつき、母の出産をかなり困難なものにした。この時からすでに僕は姉と仲が良かったのかもしれない。そのせいで母は五十日も入院して僕を出産した。「犬のような出産がしたい」という母の願いは全く実現できず、何時間もかかる大きな手術で僕が誕生した。うまれたあと、僕は二週間入院し、母は一日一回、母乳を届けていたらしい。生まれる前も生まれてすぐも、今と変わらず面倒をかける子どもであったことは否めない。

僕が母のお腹にいたときのエコー写真を見たことがある。確かに最初は二つの命が写っていて、途中から一つになっていった。とても不思議な感覚だった。もしこの命が入れ替わっていたら僕はこの世に存在しなかった。部活で汗を流すことも、友達と笑うことも、テスト返して緊張することもなく、数センチの相棒に後を託す側の命だったかもしれない。しかし、相棒に命を託されたには理由があるのではないかと思う。

僕は二センチの相棒を含むたくさんの人の思いを受けて

う一つの命が存在していた。僕は双子だったらしい。母の不安は、姉の出産でお腹を切っているから、次の子どもが双子だと子宮が破裂する可能性があるかと病院で言われたからだだった。双子はそもそも自然淘汰されることが多いらしいから、しばらく様子を見て片方の胎児の心臓を止める処置をするかどうか決めなければならず、母は大変悩んだそう。二つの命を優先して危険を冒すか、一つの命を守り切るのか。

母は一つの命を守り切ることに決めた。姉を母親のいない子どもにするわけにはいかなかったからだ。とても難しい決断だったと思う。処置をするために病院へ行くと、二つある命の片方の心臓が止まっていた。これがいわゆる自然淘汰であろう。このときの胎児の大きさは二センチと三センチ。二センチの相棒は、三センチの相棒に「あとは頼

この世に誕生した。今までよりもさらに色々なことを頑張って、恩返しをしたいと思う。相棒に命を託された理由を探しながら人生を歩んでいこうと思う。

講評

姉出産時の帝王切開と不妊治療の末に授かった双子の命だが、双方産むことは難しいとされ自分が生を受ける。双子のうち一つの命について、兄でも弟でもなく、まさにこれしかない呼び名である「相棒」。いのちを託された理由を探しながら生きていくと綴るフレーズが大変印象的である。姉の話題に触れたことにより一層のふくらみを持たせることに繋がっている。また、一連の内容をドラマと呼ぶなど中2生らしさを感じさせる作品である。

優秀賞・選考委員特別賞

クマゼミの命

京都市立上京中学校 三年二組 田中 美早

雨上がりの下校時、空き家のガレージの前を通ると視界の端で何かがうごめいた。気になり、目を向けると、それはクマさんだった。正確にはクマゼミだが、私は親しみを込めて会ったクマゼミを「クマさん」と呼んでいる。クマさんはひっくり返ってしまったらしく、脚を必死に動かしていた。その傍らにクマさんの抜け殻があった。

「元に戻す位なら手助けして良いだろう」と考え、私は持っていた傘でクマさんを起こそうとした。しかし、地面に張り付いた様に動かせない。その時、違和感に気付いた。クマさんの羽が曲がっているのだ。そして、分かった。クマさんは羽化に失敗したのだ。

つつき起こす事は難しいので諦め、バタつくクマさんの脚に石突を近づけた。ツルツルとしたビニール傘の先に掴まれるのか心配だったが、クマさんはギザギザした足を一

ぶしく感じた。

すると、クマさんがまた脚を滑らせ、地面に落ちた。私は再び傘を持ち、クマさんを掴まらせ、掴まりやすい木に留まらせようと考えた。しかし、祖母の言っていた事が頭をよぎった。

「生き物の森羅万象に手を出したらあかん。」

またガレージに留まっても、羽の重みでクマさんはまた落ちる。近くにアリアがいるとはいえ、コンクリートの地面に落ちるのだ。クマさんが還る場所ではない。人によって作られたつるつるのガレージに脚を滑らせ、羽化に失敗し、落ち、人工のコンクリートの地面で死んでしまうことがやるせなかった。そして何より、クマさんが生きようとしていたのに、それが叶わないことが悲しかった。

私はクマさんに乗せた傘を我が家の庭に植わっているユスラウメの前まで持って行き、太い幹に近づけた。

クマさんは木に降り、上へ上へ、ゆっくりと登って行く。桜や金木犀の木ではないが、木を登るクマさんは本来の姿を取り戻していた。

クマさんを通して、私は人間や人工物によって命を脅かされている生き物があることを知った。体の大きさや力の強さ、寿命の長さに違いはあれど、昆虫も犬も猫も植物も

本一本しっかりと絡みつけ、離れないようにキュッと掴まった。

傘をそっと持ち上げると、不安は裏切られ何事もなく地面から剥がれた。傘が下がり、脚を地面に着けたクマさんはのっそのつそとコンクリートの地面を這い、ガレージの下の方で静かに留まった。私に来る前からも、もがき、体力を消耗しているはずなのに、一体この小さな体から握まり、歩む力が出てくるのだろうかと思わせた。

羽の形はもう変わらない。しかし、三分経っても、五分経っても、クマさんは錆びたガレージに留まり続けた。

「やめえな。羽がもう緑になってるやん。」

羽は痛々しく曲ったまま渴き切り、体は焦げ茶になっている。ガレージに脚を滑らせながら、それでも一生懸命留まり、乾かす様子は「生きてやる」と言っているようで、ま

皆、生きる物である。人間は思考して命を奪うことが出来る。それと同時に助けることも出来る。それなら私は後者になりたい。そのために、身近な命を意識して生活していきたい。

講評

羽化に失敗し仰向けのクマゼミ。日頃より祖母から「森羅万象に手を出すな」と強く言われつつも、クマゼミから感じる生命力と、それが人間と人工物により脅かされていることについて手を出さずにはいられない葛藤を綴る。作品の中でクマゼミを巡る自身の世界観がしっかり貫かれており、鮮やかに読む者に伝わってくる。描写に目と耳の研ぎ澄まされた感覚を感じる。また、祖母の登場のタイミングも絶妙である。

だいすきなひいおばあちゃん

姫路市立荒川小学校 一年一組 天野 誠大

ぼくがゆりぐみさんのとき、ひいおばあちゃんがしんでしまいました。びょういんのせんせいからでんわがあつて、おばあちゃんと、いもうとのしいちゃんといっしょにびょういんにいったけれど、ついたときにはもう、ひいおばあちゃんはしんでしまっていました。おかあさんのおたんじょうびのまえのひでした。おかあさんはあとからきて、ずっとしずかにないていました。

おばあちゃんに、
「さわってあげて。」

といわれて、かおをさわってみたら、あついひなのに、ひいおばあちゃんはつめたくてびっくりしました。

「ほんとうにしんじやったのかな。」

とおもって、しんぞうをさわってみたけれど、しんぞうはうごいていませんでした。

んな。いっばいいいっばいいいっばいたのしいことをしたんだよ。」

と、おかあさんがおしえてくれました。

ぼくは、それをきいてすこしよかったとおもいました。ひいおばあちゃんにもうあえないのはさみしいけれど、ぼくもひいおばあちゃんみたいにたのしくわらおうとおもいました。そして、ひいおばあちゃんがおそらからみてくれていたらいいなとおもいました。

またあおうね

姫路市立安室小学校 一年三組 北浦 知佳

なつやすみにこうえんであそんでいたら、きのちかくのじめんのなかからセミのようちゅうがでてきました。まいとしセミをつかまえたり、かんさつをしていましたが、ようちゅうがあなからでてくるところをはじめてみました。とてもうれしくて、おとうさんにもみせたくて、いえにつれてかえりました。とちゅうで、なんかじめんにおとししまいました。

おとうさんにみせたあと、むしかごに連れてかんさつし

おそうしきのときは、おかあさんもおばあちゃんもまさひろくんともあきくんも、みんなないていました。

「もうあえないのがかしい。」

といっていました。ぼくはそのとき、しぬっていうのはもうあえなくなるっていうことなんだ、とわかって、かなしきもちになりました。そのあとぼくはなんだかこわくなって、おとうさんとおかあさんに、

「ぼくもしんじやうの。」

とききました。おとうさんとおかあさんは

「そうだよ。けど、せいだいがしょうがくせいになって、

おにいさんになって、おとなになって、おとうさんになっ

て、おじいさんになって、ひいおじいさんになって、いっ

ぱいいいっばいたのしいことをしてから、しぬんだよ。」

といいました。

「ひいおばあちゃんもいっばいたのしいことをしたの。」

ときくと、

「そうだよ。ひいおばあちゃんは、いっつもわらってたも

ていました。あしたにはせみになっているのかな、なんのせみになるのだろうとかんがえて、わくわくしていました。

ところが、だんだんふあんになりました。ようちゅうが、

むしかごのなかのぼうにつかまろうとしてもおちてしまいます。なんどもつかまろうとしています。おちてびっくりかえります。どんどんふあんになり、おとうさんにセミのようちゅうのことをききました。ようちゅうは、あまりさわってはいけないことと、つかまることができなければしんでしまうことをおしえてもらいました。

つぎのひ、ようちゅうはしんでいました。とてもかなしく

くてなきました。こうえんでみつけたとき、さわらなければよかったです。こうえんでみつけたとき、さわらなければよ

くなかったのかな、とおもいました。とてもかなしかったです。

そのあと、ようちゅうをつちのなかにうめました。ごめ

んね、といいました。

あとから、セミのようちゅうはそとにでてくるまでな

ねんもかかるとしりました。びっくりしました。ながいあいだまって、やっとでてきたようちゅうでした。またかなしくなりました。いきものいのちをたいせつにしようとお

もいました。むしもおはなもいきています。みんなたい

せつです。ようちゅうさん、ごめんね。またあおうね。

ぼくのクワガタとカブトムシ

姫路市立船場小学校 一年一組 小林 治永

きのう、オオクワガタのメスがしんだ。オスとけっこんさせて、さんらんセットのなかにいれたあと、ひさしぶりにみたらしんでいた。

ぼくのいえにはたくさんのカブトムシとクワガタムシがいる。けれど、どれだけたくさんいても、いっぴきでもしぬとかなしいきもちになる。おはかをつくったとき、おかあさんは、

「またうまれかわってあえるよ。」

といったけど、ぼくは、しんだらもうあえないとおもう。

きょねんつかまえたカブトムシが40こもたまごをうんだときはうれしかった。おおきくなって、ことしうかしたと

守れなかったカモのいのち

養父市立建屋小学校 三年一組 松田 帆高

ぼくがかつているカモが、夏休みの台風七号のとき、四羽、いのちを失った。約三か月前、ぼくがじっと見守る中、たまごからうまれてきた七羽のうちの四羽だ。

五月十二日、カモのたまごを親せきのおじさんからもらった。ぼくは、たまごを温めるきかいに入れて、毎日かんさつした。ライトをたまごにあてると、黒いかげや血管が見えた。でも、心ぞうが動くけはいがないから、だめだと思った。ところが一週間後、七こともコロコロと小さく動いていた。ぼくは、元気いっぱいいのちのちからを感じた。

五月二十七日の朝、くちばしで、からをつついてわろうとしていたたまごが一こあった。しばらくすると、自分のちからでカモの赤ちゃんが出てきた。二こ目のたまごにひびがはいると、はじめに生まれた子がたまごをつつきにいった。早く出て、仲間になろうと協力しているようだった。次々と生まれ、七このたまごは、七羽のカモの赤ちゃんになった。

その日から五日間は、スポイトでさとう水をのませた。

きはかつこよかった。しんだオオクワガタのメスも、たくさんたまごをうんでくれていたらしいとおもう。そうしたらまた、たくさんいのちにあえるからだ。

ぼくは、けっこんしてたまごをうんだら、メスもオスもしんでもいいかなと、おもう。もちろん、ながいきしてほしいし、ムシじしんももっといきたいとおもっているとおもう。でも、いのちをふやしてからなら、しんでもまだいいのかなとおもえる。そうおかあさんにいったら、

「おかあさんも、はるととそうくんをうんだから、いつしんでもいいかな。」

と、いわれた。それは、だめだ。ことし95さいのおおばあばぐらいまでいきていてほしい。

ぼくは、ぼくのカブトムシとクワガタムシからいのちをおしえてもらっているところだ。

それからは、お米を中心にエサを与えた。シーツはフンだらけでぬれていくさいけど、朝夕ががんばってこうかんした。カモを箱から出すと、ぼくの後ろを行列になってついてきた。学校の先生に話すと、

「まちがいなく、きみが親ですね。」

と言ってくれた。

七月二日、家の中から外の池へ引っこした。その日はみんなでかたまっていたけど、広い場所で動き回って、大きく育っていった。

ところが、台風七号が直げきして大雨が降った八月十五日。夜が明けて、お父さんが、

「カモが死んでいる。」

と、ぼくに言った。ねおきだったけど、大きな声が出て、すぐに外へ見に行った。土にまじって、全身がたおれていた。ねているのではない、死んでいることがすぐにわかった。

カモをかうと決めた日から、お父さんは、「いつかお肉にして、いのちをいただくよ。」

と言っていた。ぼくにはカモがかわいくて、それがいつもいやだった。死んでしまうのは、もつと悲しかった。元気な三羽は、ぼくが守る。さいごは、ぼくのいのちになって

生きる。

台風は、かんとんにいのちをうばった。動物やぼくたちのいのちを守るために、自然さいがいにもっと本気にならないといけない。

「ありがとう」のまほう

姫路市立城乾小学校 三年一組 渡邊 応介

ぼくが今よりもっと小さかったとき、お母さんがいつもねる前にぼくのぜんぶにありがとうを言ってくれました。

「応介の目、今日もいろんなけしきを見せてくれてありがとう。応介の耳、今日もみんなの声をとどけてくれてありがとう。応介のおなか、応介が生まれてからずっと、休むことなく動いてくれてありがとう。応介の足、応介が行きたい方向へあるいてくれてありがとう。応介の手、こうやってママの手をしっかりにぎって覚えてくれてありがとう。

らも毎日、生きている、このいのちにかんしゃしてすこしいきたいです。お父さんお母さんぼくをまもってくれてありがとう。

生まれてきてよかった

私立智辯学園和歌山小学校 四年一組 上村 晃司

最近、ぼくが感じた特別な出来事があります。早くねたいのねれない夜があつて、ごろごろね返りを打ったり、お布団をかぶったりしていました。目をとじてもすぐに開いてしまつて、電気を消した暗い部屋のかべやカーテンを見ていました。すると、同じ部屋でねていたお母さんが、「どうしたの。ねれないの。」

と、きいてくれました。ぼくは、

「うん、なんでかなあ。」と答えました。

すると、お母さんが

「疲れてるんかな。足のマッサージしよか。」

と言つて、ぼくの足をもんでくれました。暗くて時計は見えなかつたけど、多分、二十分位もんでくれたと思います。

う。応介、生まれてきてくれてありがとう。応介はそのままでもいいんだよ。」

お母さんの言葉をきくとぼくの心がおちついて、そのまま朝までぐっすりねむれました。

ぼくは赤ちゃんのころから、夜中に救急車で運ばれたり、病気で入院したり、けがをして頭を何度もぬったそうです。そのたびにお父さんとお母さんは心配して、今日も元気にさせているのがこのよで一番すばらしいきせきだと思つたそうです。

だから、ぼくがねる前に、毎日ありがとうを言うようになったそうです。

今は、お母さんは妹のおせわでいそがしいので、ぼくは自分で、自分の体に毎日ありがとうをつたえてからねています。学校やサッカーでつかれた日は特にいっぱい、ありがとうを言います。すると、体がぼかぼかしてきます。

いつもあたり前のようにすごしているけど、今日一日を生きて何が何よりもすごいきせきだと思つています。これか

それなのに、全然ねむくならなくて、ぼくの目はぼつちり開いたままでした。お母さんは働いていて、明日も仕事があるのにぼくのせいでねれません。ぼくはあせつてきました。

ところが、お母さんはくすくす笑つて、

「しゃーないなあ。そいねしちやるわ。」

と言いながらぼくの横に転がつてきて、ぼくをぎゅっとだきしめてくれました。ぼくもお母さんにだきつきました。ゆっくり息をしていると、ぼくの右の耳にお母さんの心ぞうの音がどくん、どくと聞こえてきました。その音を聞いているうちに、ぼくはねてしまいました。

次の日、お母さんが

「晃司。夕べそいねした後、二、三秒でねむつたよ。お母さん、びっくりしたで。」

と言いました。それを聞いて、ぼくもびっくりしました。あんなにねれなかつたのに、そんなに早くねれるのでしょか。一緒に話を聞いていたあばあちゃんが、

「赤ちゃんはおなかの中でお母さんの心音を聞いて育つから、生まれてきてからも心音を聞くと安心するらしいよ。」

と教えてくれました。ぼくはふと、お母さんのおなかの中

にいたころのぼくを想ぞうしました。お風呂の中で力をぬいた時、すーっとうでや足がういてくる感じと似ているんじゃないかと思えます。お母さんの心ぞうの音ややさしい声がひびきます。ぼくは、お母さんの子どもに生まれてきてよかったなと思いました。

過去を生きぬいたコンクリート戦士

私立智辯学園和歌山小学校 四年二組 延興 晟一良

七月のむし暑い日、朝ごはんを食べていたら、母がとつ然まどの外を指して、
「あっ！あれ見て！」

と言った。見ると、庭の境界フェンスに一匹の大きなクマゼミがとまっていた。フェンスのすぐ後ろには大きなヤマモモの木があるのに、「クマ」はそっちには行かず、ぼくの家のフェンスのアルミのぼうにつかまっていた。

カーやブルドーザーの敵たちに命をねらわれたり、「生芝もいいけど、手入れが楽な人工芝もいいなあ。」というぼく達人間の勝手な都合で命を落としそうにもなった。

ぬけがらの周りにクマの穴は見当たらなかった。クマは庭のどこか遠くの方で地上に出て、羽化する場所を探して歩き、そしてやっとこのブロックべいにとどりついたのだ。ぼくは、コンクリートにしがみついているばっくり開いた背中から、「死んでたまるか！」というクマの声を聞いた気がした。

かがやくいのち

西宮市立東山台小学校 四年二組 合田 京介

ぼくは、お父さんの「いなか」に行くのがいやでたまりませんでした。田んぼや畑やぞう木林ばかりで、遊ぶところがないと思ったからです。スマホもゲームも使えないなんて、何をしてもいいのかがぼくにはわかりませんでした。

「家族みんなで「いなか」に出発したのは夜中でした。車で三時間ぐらいかかると聞いていたけれど、ぼくはほとんどねていたのであんまり覚えていません。」

もっと近くで見ようと、まどに近づいたしゅん間、ぼくはある物を見つけて思わず外にとび出した。クマの数センチ下のコンクリートのブロックべいに、まだ新しいセミのぬけがらがひっついていていた。そして、クマはあつという間にとりのヤマモモの木に飛び移っていった。

「産んでもらった場所に帰ったんちがう？」
と母が言った。母は、とりの家のヤマモモの木の根っこが、幼虫のクマをひつつけたまま地中で成長して、ぼくの家の中にえつ境してきたと考えていた。でもそれはちがう。セミは生きた木には卵を産まない。かれ木の中に卵を産み、卵のまま一年を過ごす。ふ化したら地上において土の中にもぐり、木の根の汁をすいながら幼虫のまま五年ほど生きる。

六年前、ここには古い家が建っていて、木が生いしげっていた。きつとクマはその時代に産まれたのだ。数年後、家は取りこわされ、たく地になり、クマ達は取り残された。やがて新しい家の建ちく工事が始まり、クマ達はシヨベル光だそうです。

次の日の夜、お父さんといっしょにぼくは近くの川まで出かけました。きのう見た星が今日はとてもひくいところにあつて、すごいすごいとぼくが言うとお父さんは「あれはホタルだよ」と笑って言いました。ホタルは、空気や水がきれいなところで見ることができないし、光るのは一週間くらいだということも聞きました。

何万年もかかるとどいた星の光と、何日間かしか生きられないホタルの光は、どっちも同じくらいきれいで、ぼくは「いなか」もそんなに悪くないと思うようになりました。

消えたムクドリ

神戸市立竹の台小学校 五年一組 空閑 晴彦

ぼくは去年から明石駅前の塾に通い始めた。そこに行くのはだいたい夕方の五時ごろ。お母さんの車で明石城のお堀の横を通りすぎ、電車の高架下をくぐるとビルとビルの間に空が見える。ぼくが塾に行く夕方五時は、いつもそこに黒い大きな雲が広がっていた。その黒い雲の正体はムクドリの大群だった。ムクドリは群れで行動する習性があるため、何百羽ものムクドリが一斉に空を飛んでいるとまるで大きな黒い雲が空でうねっているみたいに見えるのだ。ムクドリたちはぼくの塾が入っているビルの壁一面にしている柵を巣にしているようだった。そのせいで、ビルの周りの地面はフンで真っ白。においも臭い。鳴き声も耳をつんざくすさまじさ。ぼくといわず、お母さんや周りの人もきつと不快に感じていただろう。ぼくはムクドリの事がきらいだった。

なってしまったのだ。伐採の理由は『古い木は人にとって危ないから』だった。人のために木は切られてしまった。そこにはムクドリなどの鳥や虫も住んでいたのに。住む場所を失ったムクドリは町へやって来て、やっこの思いでビルを見つけ、巣にした。それなのにそこで、人にきらわれてきらわれて、ついにはビルからも追い出されてしまった。ビルの周りはきれいになって、もうあのうるさい鳴き声も聞こえない。ぼくたち人間は快適になった。だけどあのムクドリたちは？今も行きどころなくさまよっているのだろうか。別のすみかを無事に見つけられたのだろうか。ムクドリはぼくに人間の自分勝手さを教えてくれた。快適さを求めるあまり他の生き物の事を大事にしてあげられなかった。人はもっと命を平等にあつかうようにならなくてはいけない。ぼくはいつか、人間と他の生き物たちが共生できる世界を作りたい。そして、『消えたムクドリ』をもう一度木に帰したい。

ある日、ムクドリたち黒い雲がおかしな動きをしていた。ビルの巣に戻ろうとする黒い雲の中に一羽の大きな鳥がつっこんで行く、タカだ！ビルの屋上にタカ匠がいて、何度もタカを放ち、ムクドリたちをビルに近づかせないようしていた。お母さんは初めて見るタカ匠の技に

「かっこいい！すごい、すごい」と興奮していた。黒い雲はタカから逃げるようにうねってひねって、それでもなんとかビルの巣に近づこうとしていた。しかし、たどりつけるのは数羽。大きな雲は困ったように、空でうねり続けていた。そんな光景が何日か続き、黒い雲はだんだん小さく細かくばらばらになって、一週間もするとあとかたもなく消えてしまった。嫌いなムクドリがいなくなつたが、ぼくはなんだか悲しかった。ムクドリがどこへ行ったのか心配になったのだ。

そもそもムクドリはどこから来たのだろうか。おそらく明石城の木々からやって来たのだと思う。なぜなら数年前明石城の木々は大量に伐採されて、約千七百本が切り株に

わが家の合言葉

たつの市立播保小学校 五年一組 宮崎 りの

「気を付けてな。けがせんようにな。」

小学校になってから毎朝聞いてきたセリフ。家を出る時、必ず母が言う。一応約束は守って、転ばないように気を付けてはいる。そのおかげかどうか分からないが、登下校中にこけたことは、一度もない。

それなのに。ある日、いつものように家で母の帰りを待っている時、

「ただいま。」

と玄関で母の声。ここまではいつもと変わらなかつたが、ドアから母が入ってきたしゅんかん、目と耳をうたがった。

「親指 骨折してもた。」

私は、

「えっ、なに？」

と聞き返した。包帯がまかれている足を見て、さらにあせつた。聞くと、物につまずいて足の親指の骨が折れてしまったとのこと。

「なにそれ！いつも、『気を付けて』って言うの、お母さんやん！私よりもお母さんの方が一番気を付けなあ

かんわ！私が全部するから、お願いやからもう動かんといて！」

と、思わず母に向かって言ってしまった。「骨折」というものを初めて身近に見た私は、とにかくあせった。まさかお母さんが骨折するなんて…。いつも走り回っているお母さんが…。『骨折って痛いやろうな。お母さん、かわいそうに。』とか、『もう、仕事行かずにお休みして、家でゆっくり治してほしい。』とか、悲しくて次々に思いがあふれてきた。でも、だんだん『つまりただで骨折するなんて、どんくさすぎるわ。』と、くやしい気持ちまで出てきた。だって、足に体重かけられないってことは、ねる前にぎゅってしてもらえなくなるって気づいたから。一日頑張った力が、すうっとぬけて、ほっとする大好きな時間だったのに。おふろも一人で入らないといけないって気づいたから。大好きなおしゃべりタイムだったのに。

これほど『けがも病気もしてほしくない。大事に、気を付けて過ごしてほしい。』という気持ちになったのは、初

めてかもしれない。母が、毎朝私に言う「気を付けてな。」の意味がよく分かった。おまけに、「好ききらいなくきちんと食べなさい。」の意味や、毎晩の「早くねなさい。」の意味までよく分かった。栄養と、十分なすいみんをとって、じょうぶな体にしておきなさいってことだね。これからは、めんどくさそうな「はいはい。」ではなく、「はい。」って笑顔で返事して、きちんと言いつけを守る。大事にこの命を生きる。

そして、この骨折事件以来、わが家の毎朝のやりとり一言加わった。

「気を付けてな。けがせんようにな。」(母)

「お母さんもな。」(私)

命の大切さを胸に

大阪教育大学附属平野小学校 六年一組 白井 李佳

高学年になって、学校で「死ね」という言葉を聞くことが増えた。どんな時に「死ね」と言っているのか見ていると、鬼ごっこをしていて、捕まったことが悔しい時や友達に注意されたことが気に入らなかつた時など、さまざま。でも、その言葉で自分の気持ちをきちんと相手に伝えることはできたのだろうか。こんな時、発せられる「死ね」という言葉は、簡単に他の言葉に置きかえられるようなことばかりだ。捕まったことが悔しかったら「悔しい」、注意されたことが気に入らないなら、「もっと優しく言っしてほしい」「そういうつもりではなかった」など、気持ちを表現し、伝える言葉はたくさんある。

私は人が死ぬということがどういふことなのか考えてみた。死ぬと天国に行くとか、悪いことをすると地獄に行くとか絵本で見ただけで、「死ぬ」ということは、この世界からいなくなるということ。ゲームのように生き返ったりもしない。もどってくることもできない。もし、大切な人が死んでしまったらどんな気持ちになるのだろう。悲しくて、できることならそんなことが起らないでほしいと思う。

「死ね」なんて、友達に言っている言葉なのだろうか。もし身近な人やクラスの友達に「死ね！」と言われたら、どんな気持ちになるだろう。腹が立つのではなく、きつと、とても悲しい気持ちになるだろう。言い返したりなどできない。だれとも話したくなくなってしまうだろう。そう考えると、「死ね」と言っているはずがないと思った。

ある日、同じクラスの子が、友達に向かって「死ね！」と言っていた。私は勇気を出して、その子に「死ねとか言ったあかんよ。」と言った。「うるさいな、お前も死ね！」と言われるのではないかとドキドキした。でもそんなことはなく、その子は少し驚いた様子だった。

もしかしたら、本当に「死んでほしい」と思って「死ね」と言っているわけではないのかもしれない。そして、「死ね」という言葉に少し慣れてしまっているのかもしれない。ゲームの中の対戦相手に投げかけるのと同じ気持ちで使っているだけなのかもしれない。でも、その言葉で周りの人を傷つけていないか考えてほしい。「死ね」では伝わらない「思い」を、もっと想像力をふくらませて、たくさん言葉で伝えられたらと思う。命の大切さを胸に。

命をいただきます

茨木市立春日小学校 六年二組 伊達 亮輔

ぼくのおじいちゃんは、りょう師です。なので物心ついた頃には、食たくにはイノシシやシカが並んでいます。北海道でとったエゾシカのステーキや、バーベキューでイノシシのお肉を焼くのがとても大好きです。ぼくはこうやっておいしく調理したものを食べますが、それまでにくさんの工程があるということに気づきました。

小学三年生の夏休み、おじいちゃんの畑仕事を手伝いに行った日のことです。その帰り道、軽トラックに乗り畑からさらに山おくへ向かいました。有害くじよの仕事です。一年中農作物のひ害で困っている家がたくさんあることを聞きました。ワナという仕かけで畑をあらしているイノシシがとれているかの確にんでした。ドキドキした気持ちでぼくはだいはなれた所からワナを見ました。いませんでした。ぼくは内心ホツとしました。もしイノシシがいたら

ほかにもたくさんの方に気づきました。

それからぼくは、農作物があらされて困っているニュースにきょう味を持ち始めました。最初はぼくたち人間は勝手だと思いました。しかし、本を読んだりしているうちに、少しずつですが、おじいちゃんの仕事も大切なことがわかりました。

今はもう六年生。たくさん学びから知識がつき、ぼくの気持ちはしっかり強くなりました。

「命をいただく」こと。ぼくにとつてすごく難しいことでしたが、今はしっかり手をあわせて感謝の気持ちをこめて大きな声で「いただきます」

と言えるようになりました。

今、ぼくは食用のために、悪いかん境の中で牛、ぶた、にわとりが育てられていることを知っています。食べる目的のためだけに育てられている動物の命を考えると悲しくなります。

それよりも自然の中で生きぬいたイノシシやシカがおいしいことや、食べてへらしていくことの必要性を伝えられるような大人になりたいです。

そして、おじいちゃんのようにかっこよくとしをとりた

急いでじゅうを取りに帰ってうつと聞いたからです。

その時初めて食たくに並ぶイノシシ料理の最初の工程を知ってしまいました。

「命」

が終わるしゅん間です。大好きなおじいちゃんのはずなのに、あまりしゃべりたくありませんでした。

その日の夜。ぼくは冷たいそうめんしか食べることができませんでした。となりで妹がちりめんじゃこをおいしそうにほおばっていました。大きく成長するはずの魚の赤ちゃん。生まれて一しゅんの魚たちの命であることを。前でお姉ちゃんが、とりのからあげをおかわりしていました。にわたりの命であることを。

数日間少し変な気持ちで過ごしたような気がします。でもおなかは空くし、お母さんが一生けん命おいしい料理を作っているすがたを見て気づきました。

ぼくたちの食たくには、たくさん命であふれていることを。そしてぼくたちの体を大きくしてくれていることを。

いす。

命を大切にすること

御坊市日高川町学校組合立大成中学校 一年二組 北 結衣

私は、小さい頃から、「しゃべっていることが伝わりにくい。」という病気から、「耳が聞こえにくい。」という障害につながり、保育園に入った頃から入退院をくりかえしては何度も手術を受けてきました。小学校の授業では、先生の説明や、国語の聞き取り、授業中の発言、友達たちのおしゃべりも十分聞きとれませんでした。スムーズに会話ができないので「みんなの迷惑になる。」と思い、十分内容を理解しないまま、聞こえた会話から推測し、その場に合う相づちを打って会話をしていた頃もありました。さらに学年が上がるごとに授業やテストが難しくなり、聞きのがし、理解しないまま進んでしまい、納得のいく点がとれないこともありました。四年生から、補聴器をつけはじめ、聞き取りやすくなりましたが、それでもすべてが聞こえるようにはなりません。夏になると汗で耳にばい菌が入ったりして化膿し何度も病院に通わなくてはなりま

せんでした。入院となると小さい頃のように母がずっとつきまわることができず、一人で入院をしないでほしいませんでした。「こんなんで生まれたくなかった。」「病気もない普通の体で生まれたかった。」と思うことが多くなってきました。

でも、学校を休みたいと思ったことはありませんでした。周りの友達やクラスの仲間が他の人と同じように私と話してくれたり、接してくれたり、遊んでくれたりしてくれたりからです。差別や、特別扱いをしたり、「かわいそう。」という言葉なども言われた事はありません。本当にこのクラス、この友達がいてよかったと思いました。さらに、先生の言っていたことが分からなくても、友達に聞くと、教えてくれたり、話すとき、私の言っていることが分からないときは、スルーせずに「今、何て言った。」「もう一回言つて。」と言ってくれるので、「ああ〜ちゃんと聞いてくれるなあ。」と分かって嬉しくなりました。

そこで、私は障害者の気持ちについて考えてみました。

ほんの少しの心配りさえあれば、誰でも安心して生活できると思います。命を大切にすることとは、互いに心を配ることから始まると私は思います。

じいちゃんの骨

尼崎市立中央中学校 一年五組 増山 晶紀

じいちゃん、元気でいますか。じいちゃんが私たちの前からいなくなつて、もう4年がたちますね。

じいちゃんの骨は、今も私の部屋のたなの上にあります。じいちゃんが骨だけになってしまったとき、葬儀所の人に頼んでもらった骨です。無理なお願いかもしれないと思いますが、父を通してお願いしてみたら、少しおどろいていました。快くじいちゃんの骨の一部をくれたのです。それどころか、ティッシュで骨をつつもうとしていた私たちのために、「ちょっと待っていてください」と言つて、葬儀所の人はどこかへ行き、そのあと骨を入れるためのきれいな入れ物もくださいました。そのことをじいちゃんが知ったら、びっくりするかもしれませんね。でも、きっといつものようににこにこ笑つて、「晶紀、ありがとう。晶

私は聞こえにくいだけですが、もし全く聞こえない人の生活はどんな感じなのだろうと。友達と会話するときは、手話や読唇術、筆談を使わないとできません。そうになると、正面に相手の顔がないとやりとりできません。急に後ろから肩をたたかれたら、とてもびっくりするし、こわいと思います。耳が聞こえない人は、外見では見分けがつかずません。ですから、周りの人たちは当然聞こえるものとして接してしまいます。一見、障害があると分かりにくい人も、苦労することは多いはず。

最近、そういった人たちが身につけているシールやバッジが広がりつつあります。外出したときなど、携帯画面ばかり見ずに、たまには周りの人たちに目を配つてあげてほしいと思います。

でも、障害者はかわいそうと思われたり、注目されるのはいやだと思えます。障害者は特別扱いをされたくないし、普通にみんなと過ごして、会話もしたいと思つているはず。

晶紀は本当にいい子だな」と言ってくれるのではないかと思います。

たなの上の、白い小さな入れ物に入ったじいちゃんの骨を見ると、そこにじいちゃんがいるような気がします。部屋に行くと、いつも全力で遊んでくれたじいちゃん、いつも「晶紀はかわいい。かしこいよ。」と言つてくれたじいちゃん、ぜつたいにおこらなかつたじいちゃん。私はじいちゃんの部屋に行くのが大好きでした。小さいときは、ごはんの時間までじいちゃんの部屋で遊び、ごはんを食べるとまたじいちゃんの部屋で遊びました。

じいちゃんがいなくなつてから、私は小学校で少し大変なときがありました。そのときは友だちに会いたくなくなつたです。ですから学校へも行きたくなくなつたです。母にじいちゃんたちが住んでいる富山へ帰りたいとお願ひもしました。しかし、そのときの担任の先生が家まで来てくれ、いろいろ話を聞いてくれました。その先生のおかげで、またがんばつて、学校へ行けるようになりました。私がまだ小さかったころ、テーブルに頭をぶつけて泣いていたとき、じいちゃんはテーブルにいっしょうけんめいおこつていました。そのときと同じように、もしかしてじいちゃんが先生を通じて私を助けてくれたのかもしれないね。

じいちゃん、私は今はとても楽しく中学校生活を送っています。これからも大変なときがあるかもしれませんが。そのときはまた助けてくださいね。おねがいします。

ばあちゃんの庭

私立小林聖心女子学院中学校 一年 安賀 奈穂

曾祖母は大きな庭をもっている。

移ろいゆく季節を眺めるのにちょうどいい美しい庭だった。冬は、椿と梅。春の初めは馬酔木。ゴールデンウィークにはサツキや菖蒲が一齐に咲きそろう。初夏には芍薬で大きな花束を作った。夏は紅葉の新緑が美しく、クレマチスの青が涼やかだった。そして撫子や桔梗などの秋の七草が全部そろった。でも、もう曾祖母はここにはいない。主のいなくなった庭はすさんでいき、つゆ草はどこで咲けばいいのかまるで曾祖母を探しているかのように小道にまで

だった。花を摘んでも怒られないし、花束を作ると喜んでくれた。

私の中の曾祖母は、庭も含めて曾祖母だった。曾祖母の大切にしていた花を抜くのは曾祖母のアイデンティティを壊しているようで胸が締め付けられた。見上げると、私の心とは裏腹に空はバカみたいに晴れ、こんもりと盛り付けられた入道雲が私を見下ろしていた。夏の熱風が吹き抜ける中、私は一人寒空の下にとり残された幼子のように心細かった。

真夏は暑すぎて花が減る。季節外れのつゆ草を持って私は曾祖母に会いに行った。曾祖母はいつも変わらぬ笑顔で迎えてくれる。

「ばあちゃん、来たよ。」

返事はない。それもそうだ。なぜなら今日は、曾祖母の初盆だから。

私が生まれる前からずっと、隅々まで曾祖母の目の行き届いていた庭が、たった一年でまるで別物の気配をまといよそよそしい。

ばあちゃんの不在を庭につきつけられた、そんな気がした。

できている。

去年の九月、曾祖母が倒れた。そこからここは一変した。屋敷にはだれもいなくなり、庭は荒れ、曾祖母は私の知らないどこか遠くに行ってしまった。

わたしは祖母と一緒に曾祖母の庭の手入れをしていた。今、曾祖母はお盆なので帰ってきている。でも、私達と庭の草引きをすることはできない。祖母が言った。「この草も抜いちゃって。」と。それはまだ咲いていない吾亦紅だった。曾祖母が大切にしていた花。曾祖母なら抜かなかつただろう。でも、私はその花を抜いた。曾祖母ならどう思うだろう。そんな考えが頭をよぎった。ただただ悲しかった。手入れの行き届いていない庭を見ることも、その庭にまるでとどめを刺しているかのように草引きをしていることも。

曾祖母が元気なころは、庭は生き生きとしていて、花や草木が季節を教えてくれた。私は曾祖母に花の名前や花の思い出を教えてもらいながら庭を散歩するのが大好き

ぐりとの出会い

大津市立仰木中学校 二年四組 安達 桜咲

生き物を飼う。それは私にとってすごく怖くて怖くてたまらないものです。

私の家では一年前ぐらいから犬か猫を飼おうという話が出ていました。もちろん私は猛反対。父や母、きょうだいたちには、お散歩が面倒臭さそう。面倒をしつかりみれない気がするなどゴダゴダと飼いたくない理由をぶつけていました。でも本当は、「死」をみたくないからです。私にとって「死」とはすごくすく怖いものです。ドラマやニュースなどで「死」を見ると、その夜は「死」のことで頭がいっぱいになります。この世からいなくなったらどこかへ行くのか、それとも無になるのか。無になったら嫌だな怖いなと。

でもその日は突然やってきました。習い事から帰っていると、家にピンクの大きな見なれないゲージがありました。私が「ただいま。」と言うと母は「おかえり。」と言ってから続けて「猫引き取ってきたよ。」と言いきりニコツと笑いました。私は突然のことすぎて何が何だか分からないままとありあえず汗をかいた体と心を落ちつかせるためにお風呂に

入りました。その日のお風呂はいつもより二十分も長く入ったのぼせてしまっていました。お風呂からあがってリビングに行くところにはやっぱり見なれないゲージがありました。猫を飼うかもしれないということは、あれから話が進んでいて私の反対の気持ちは前よりはうすらいでいました。でも実際に飼いはじめるのはまだ先のことと想っていたので私は驚いていました。そんな私をみて母は「猫見る？」と母の腕の中で眠る猫を見せてくれました。その猫は想像以上に小さく私は一目見た瞬間「かわいい」と思いました。今まで反対していた自分が嘘のように私の気持ちは一瞬で百八十度変わりました。私のその猫に対する「かわいい」は女優さんやキャラクターに対して感じる「かわいい」とは違ってもっと複雑で大切な感情です。

改めて、この夏私たち家族の一員になった猫は「ぐり」と名付けられました。名前を決めるのにはすごく時間がかかり私たちきょうだいに名前をそれぞれ意味を込めてつけてくれた父と母はすごいなと思います。「ぐり」は、人懐

今の私の「命」は楽しさを教えてくれている最中です。だから「ぐり」とはまだまだ楽しくすごしていきます。

「ぐり」これからもよろしくね。」

人の命の価値について考える

大阪教育大学附属池田中学校 二年C組 栗原 彩妃

私は父の仕事の都合で幼稚園の年少から年中にかけて長崎市内で生活をした。当時は、まだとても幼く記憶もぼんやりとしているが、二年程過ごした長崎の街には、二つの思い出がある。一つは、稲佐山の上から見下ろす長崎の夜景だ。何度か見たそれは、都会のキラキラした物ではなく、その一つ一つに家庭の温もりを感じる穏やかさにあふれ、小さな私の記憶にも残っている。

もう一つは二度程過ごした長崎の夏に経験した物々しい人数の警官による街の空気の変わり様である。八月九日が近づくにつれ街全体がある種の緊張感に包まれていくのを幼いながら感じたのを覚えている。当時はそれが何なのか正確に知ることはなかったが、家族や幼稚園の行事で何度か訪れた長崎の平和公園で行われる大きなイベントにま

こくてちょっとびりあばれんぼの生後四ヶ月の女の子です。私が「ぐり」の好きなところは、「ぐるぐる」と鳴きながら甘えてくるころ、おもちゃの猫じゃらしを私のそばにそっと置いて「遊んで」と言ってくること。他にも口がおちょぼ口なことなど書ききれないほどあります。それは裏腹にももちろん「ぐり」の苦手なところもたくさんあります。私が横になっていると私の髪の毛を食べてくるころ、私がスマホをさわっていると私の顔の前をいったり、スマホに猫パンチをしてじゃまをしてくることなどたくさんです。

そんな「ぐり」と過ごしていて私は「ぐり」の「死」について考えたことがないと気づきました。理由はただ単純に「ぐり」との生活が楽しすぎるからです。楽しくて楽しくて楽しさを感ずるのに精一杯になっているからです。

「命」とは大切にかけがえないもの。そして生きる喜びをたくさん教えてくれるもの。でも大きな大きな悲しみも教えてくれるものだと思います。

つわる喧騒である事は教えられていた。また、何となくではあるが「とても大切な事」が起こっている認識があった。それから十年近くが経ち、一九四五年の八月に長崎で起こった出来事を詳しく知るにつれ、また、原爆が投下されたから約八〇年が経とうとしている現在まで戦争が無くなる事なく、世界中のいたる所で繰り返られていることを考えると一九四五年に長崎で亡くなった七万四千もの人々の命の価値は一体世界でどの様に受けとめられているのだろうか疑問に思う。日本では毎年八月が近づくとマスコミが一斉に年中行事の様に広島と長崎の報道を繰り返す。八月十五日が過ぎると潮が引く様に人々の話題から消えていく。既に平成生まれの私達にとって一九四五年の八月は歴史の一部として教えてもらうだけの存在になっている。長崎や広島で命を落とした二〇万人以上の人々も死者数という数字で、その重みが量られるが、そこに生きて一瞬で命も奪われた名もない人達の生きた証は語られることさもなく消え去ってしまった。

日本が戦争に負けたから、一瞬にして全てが壊滅されてしまったのだから、あまりにも悲劇の数が多すぎるからという理由でそこに確かに生きづいていた一人一人の生活が突然奪われた事実から目を背ける事が正統化されても良い

のだろうか？二〇二三年の夏も東欧の地では大きな戦争が行われていて、開戦以来、何万人という人々から亡くなったことが報道されている。その死者の数の多さで事態の深刻さは伝わるが、長崎や広島のように戦争とは関係のない人々の日常が一瞬で奪われていく現実に対し私達はあまりにも無知であり無関心である。

時折テレビのニュースを通じ戦争で破壊されたマンションや住宅が映し出されるが、次の時間には楽しい地域のニュースに切り替わると私達の関心は次々と切り替わるニュースに支配されてしまう。これは今に始まった事ではなく、中東やアフリカで繰り返し発生する紛争でも同じ事が起こっている。そして、痛ましい銃撃の映像が流れた直後に流れる、お笑い番組のタレントが放つギャグに声を出して笑っている自分を、どこか軽蔑している自分に気が付いた時、何故だか正気に戻れた様に感じてほっとする。又、長崎に行くことがあったら稲佐山に登って、あの心温まる夜景を眺めてみたいと思う。幼小の頃に感じた人の生活の

そんな父との思い出で、忘れられない出来事がある。ある日、父の部屋から大きな物音がした。心配になり家族みんなで見に行ってみた。そこには倒れている父の姿があった。そんなとき僕の頭はなぜか冷静だった。「終わりか…」そう思ってしまった自分がいた。

だが、冷静だったのもつかの間、急に家族みんなで大慌てだ。僕はずっと父のそばについていた。すると父はしんどそうな口調で、「大丈夫、大丈夫」といった。そのときに父はたくさん話を話しかけていたのだろう。しかし、気が動揺しすぎて何も覚えていない。だが、父の「大丈夫、大丈夫」だけははっきりと覚えている。それが父の口癖だったのかもしれない。僕は何度この口癖に救われたのだろう。実際、父が倒れたあといくらか入院をし、ある程度父の体調はもとに戻ってきていた。その後父は誕生日を迎え、家族や親戚みんなでお祝いした。このとき、すでに父はほとんど動かない状態だった。父の誕生日の三日後、父はこの世を去った。悲しかった、辛かった、しんどかった、苦しかった。けれども、父の「大丈夫、大丈夫」を思いだして冷静になったときが幾度とあっただろうか。冷静になると自分よりしんどい思いをしている人はたくさんいるだろうし、もっと自分よりも悲しみのどん底にいる人がいるので

温もりのある灯が私の心の原点の様に懐かしい記憶として今も心の中に刻まれているから。

大丈夫、大丈夫の一言で

奈良市立平城中学校 二年一組 村上 奏太

いのちとは何なのか。そう考えるときりがないと僕は思う。僕自身、いのちと聞いてはじめて思い浮かんだのは父の姿だ。父は六十七年前にがんを患い必死に闘病生活を送ってきた。手術をたくさん行い、体にたくさん傷ができていた父の体は忘れることができない。それでも父は笑顔で、何事もないように「大丈夫、大丈夫」と言っていた。父はしんどいはずなのにいつも笑顔だった。今思い返してみると、やはり父だ。父は自分よりも家族に尽くせる人だったから、自分のことで家族に心配をかけたくなかったのだろう。

はないか。そう思うようになった。実際、世界中ではそのようなつらい思いをしている人がたくさんいる。そういう人々をなくすることはできない。だが、減らすことはできるのではないか。そう思い、まずは身近な人から救ってあげようと思った。自分に何ができるのか考え、父のように「大丈夫、大丈夫」と声をかけたこともあった。「私の辛さがわかるか」と怒られたこともあった。様々な問題があるが、自分なりの方法で、痛みを知り、周りの人の気持ちに寄り添える人になっていきたい。

最後に、この作文のテーマとなってくれた父に感謝をしたい。まともに伝えられなかったけど、ありがとう。その気持ちでいっぱいだ。

生まれてきた意味

京都市立開晴小中学校 九年三組 井上 瑠華

「人は誰にでも生まれてきた意味がある。」そんな言葉をよく耳にする。私は時々「自分は何のために生まれてきたのだろう」と考える。私にもきつと生まれてきた意味があると信じている。

ロシアとウクライナの戦争に関して、先日「犠牲者は生後二十三日の新生児を含む〇人」という報道を見た。毎日たくさんニュースで様々な理由から命を落とす人々がいることに心を痛めることも多い中で、戦争で生後たったの二十三日でこの世を去らなければならなかった人がいたことに衝撃を受け、深く心に突き刺さった。この子は何のために生まれてきたのだろうか。生まれてきた意味が誰にでもあるなんて、そんなことは誰かが言い出した綺麗事ではないのかと私は思いを巡らせた。そして、もしこの赤ちゃんに生まれてきた意味があるのならば、それはもしかしたら、この痛ましい報道を知った私を含む世界中の多くの人に、戦争について、人の命について悩み、考える機会を与えたことなのかも知れないと思った。私がそう思うことで、この赤ちゃんが生まれてきた意味があったという証明になる気がする。

私の父は、私が六才の時に三十五才でこの世を去った。弟はまだ一才になったばかりで、残された母は深い悲しみ

気付かされたり、亡くなってから分かったりすることもあると思う。簡単に見つかるものではないからこそ、私はこの先もたくさんの意味を探し、追い求めていきたい。

お弁当に込められた母の夢

京都市立開晴小中学校 九年三組 木村 太亮

不育症という言葉聞いたことがあるだろうか。不育症とは子供を授かっても元気な赤ちゃんに会えず、流産や死産を繰り返してしまうことらしいが、僕をはじめ、聞いたことがある人は少ないだろう。

専門学校で製菓を学び、料理やお菓子作りが好きだった母は、子供にお弁当を作るのが夢だった。女の子か男の子か想像しながら、どんな弁当箱にしようか、おかずはどんなものが良いか、好きなキャラクターなど、子供が弁当箱を開けたときに喜んでもらえるようなお弁当をつくりたいとゆめみてきたそうだ。父と結婚し、子供をはじめ授かったときは、夢が叶うと心から喜んでいたらしい。しかし母は元気な産声が聞けず、赤ちゃんがお空へかえってしまっただ。その時の母はどんな気持ちであっただろう。大切に

と絶望で父の後を追おうかと本気で考えてしまったことがあると話してくれた。思いとどまったのは、私と弟の二人の子供がいたこと、そして「今死んでも意味がない」と悟ったからだと言っていた。「意味のある生」を考える私にとつて、母の言った「意味のない死」という言葉が印象的だった。母が「意味のない死」を選ばなかった理由に私の存在があるのなら、それは私の「生まれてきた意味」の一つになるのではないか。母とのやりとりの中で、私が「自分は何のために生まれてきたのだろう」と考える時は、だいたいが自分が辛い時や悲しい出来事があった時、何をしても上手くいかず落ち込んでいた時ばかりであることに気がついた。答えが出るわけではないが、そういう時こそ生まれてきた意味を考え、無意識のうちに自己肯定感に繋げ、次の日の活力にしているような気がした。

「人は誰にでも生まれてきた意味がある。」私はやっぱりこの言葉を信じている。そしてその答えは一人ひとつとは限らない。自分で見つけることだけではなく、周りの人に

ていた赤ちゃんに会えず、どんなに苦しかっただろう。この話を聞いたとき、僕が想像するにはあまりにも難しかった。「辛い」「悲しい」という言葉では当然表せないと思う。そんなことが何度もあり、病院での診察で「不育症」というものであった。それを聞いた母はどんな気持ちだっただろう。僕がそのような体験をしたなら、一度で挫けてしまっている。母は妊娠6ヶ月まで病院で毎日注射をしたり薬を服用したりで五回目にしてようやく元気な産声をきくことができた。それが僕だ。僕を授かった時の母は病院でのエコー検査のたびに元気かどうか、緊張して何度も祈っていたそうだ。毎日毎日、お腹をなでながら僕に語りかけた。「病气や悪いところはお母さんのお腹に全部おいてきてね。」「どうか元気に会えますように。」と。

何度も辛い経験をしているにそれを乗り越えて産んでくれた母には感謝したい。母の夢であった「子供に弁当を作ること。今でも手間をかけておいしそうなお弁当を作ってくれている。僕ができることは、母の弁当を残さず食べることと、持って行った先での勉強や運動を精一杯頑張り、精一杯生きることだと思う。

●滋賀県

みんなの大切なのちをおもふこと

大津市立仰木の里東小学校 二年 富田 翔生

会うことのなかった命

長浜市立南郷里小学校 六年 一居 芽生

だれかに助けられて生きる

守山市立速野小学校 六年 馬淵 葵

命の形

大津市立打出中学校 一年 川端 修司

死後の世界と私の声

大津市立打出中学校 三年 曾根 陽花里

ありがとう

大津市立打出中学校 三年 田辺 志穂子

命の価値

大津市立仰木中学校 一年 遠野 美怜

命と戦う

私立近江兄弟社中学校 二年 磯貝 碧花

人生攻略本

彦根市立中央中学校 二年 井上 日和

いのち

東近江市立玉園中学校 二年 村田 心虹

かけがえのない命と平和

高島市立湖西中学校 三年 梅澤 桜子

いのちを授かる責任

高島市立湖西中学校 三年 桂田 優奈

●京都府

イルカもぼくも大じないのち

京都市立錦林小学校 一年 村田 響

私の使命

木津川市立城山台小学校 五年 森本 琉奈

セミと僕の命

京都市立開晴小学校 七年 富島 翼

生かされているわたしのいのち

京都市立開晴小学校 九年 丹羽 彩弥乃

死と言葉

京都市立旭丘中学校 一年 福嶋 このえ

僕のお兄ちゃん

京都市立桃山中学校 一年 松井 奏汰

私にもできること

京都市立桃山中学校 三年 奥田 結愛

生きるを教えてください

京都市立蜂ヶ岡中学校 一年 山本 千英

アシユリーの生き方が教えてくれたこと

京都市立下鴨中学校 二年 篠本 桃代子

つながれてきた命

京都市立加茂川中学校 二年 津田 麟太郎

いのち

京都市立加茂川中学校 二年 西村 優花

宇宙のつながる命

八幡市立男山東中学校 二年 藤本 航太郎

僕の特別な弟

私立洛南高等学校附属中学校 三年 伊佐 賢杜

家族の時間

舞鶴市立加佐中学校 三年 千坂 真穂

●大阪府

私の宝物

大阪市立鳴野小学校 三年 丹羽 紬葵

ドクドク

私立関西創価小学校 三年 濱村 知余

空を見上げて

私立大阪信愛学院小学校 四年 白川 陽渚

命のうつつわ

大阪市立西天満小学校 六年 出島 せいな

いのちを吹き込むこと

私立賢明学院小学校 六年 山根 葵緒

私の人生と命の形

堺市立金岡南中学校 一年 篠本 悠

「いのち」について

神戸市立西須磨小学校 二年 佐々木 楓菜

わたしたちのかわいいモンスター

神戸市立広陵小学校 二年 さわのぼり まゆ子

94さいのお友だち

神戸市立塩屋北小学校 二年 中川 紗愛

小さいのちのリレー

姫路市立東小学校 三年 荒木 海璃

それぞれの生き方

太子町立太田小学校 三年 猶原 未結

わたしの病気

姫路市立手柄小学校 四年 北田 陽葵

また会う日までひいおばあちゃん

姫路市立船津小学校 四年 福永 翔大

華に幸せな時間を、私の大切な文鳥へ

大阪市立北稜中学校 一年 西盛 美央

命を繋ぐことができて

高槻市立五領中学校 二年 大野 瑛琳香

一匹の犬が教えてくれたこと

大阪市立南港南中学校 二年 倉藤 さくら

与えられた命と生きづらさ

大阪教育大学附属池田中学校 二年 神山 望々花

●兵庫県

じいじありがとう

たつの市立神部小学校 一年 廣政 元紀

ひいおじいちゃんがてんごくにいったひ

たつの市立小宅小学校 一年 山田 華

たん生日

神戸市立福池小学校 五年 泉谷 希美

78年目の夏

私立神戸海星女子学院小学校 五年 齋藤 愛果

カメラの記おく

私立仁川学院小学校 五年 野村 優衣

一つしかない「いのち」

姫路市立広畑第二小学校 五年 林 海聖

生きる希望と勇気

姫路市立飾磨小学校 五年 三木 杏菜

大切な命

加古川市立平岡小学校 六年 吉田 知夏

じいちゃん復活武勇伝

兵庫県立大学附属中学校 一年 白井 志歩里

つなげ!! いのち

兵庫県立大学附属中学校 二年 岩戸 愛華

いのちの意味

兵庫県立大学附属中学校 三年 荻野 杏彩

沢山の人に愛される命にしていきたいために

私立賢明女子学院中学校 一年 田中 稟來

命の大切さを知ったあの時

神戸市立小部中学校 一年 徳永 杏奈

いのち

私立滝川第二中学校 一年 山林 芽生

成長

私立滝川第二中学校 二年 森本 千陽

一日一日を大切に

神戸市立王塚台中学校 一年 横山 結彩

人生の四季、包括的社会へ

私立神戸海星女子学院中学校 二年 齋藤 香怜

小さく美しい命

三木市立三木中学校 二年 藤原 琉稀

命

神戸市立布引中学校 三年 久保 姫菜

そばにある幸せ

尼崎市立中央中学校 三年 榮 里桜

いのちの形

神戸市立竜が台中学校 三年 杉本 萌衣

私の太陽

私立須磨学園中学校 三年 山下 真知

●和歌山県

百二十年前の大切な一枚の写真

私立智辯学園和歌山小学校 四年 大谷 碧惟

命のおすそわけ

私立智辯学園和歌山小学校 四年 濱野 雄一郎

メダカの命と私の命

私立智辯学園和歌山小学校 六年 佐藤 愛美

いのち

橋本市立応其小学校 五年 井本 優心

祖母と僕

和歌山大学教育学部附属中学校 二年 森 友章



選考を終えて

「いのち」って、どこにあるんだろう。

ぼくはときどき考えます。

「いのち」と「からだ」は同じだろうか、違うのだろうか。「いのち」と「こころ」は、どういう関係なんだろう。「いのち」が大切なものだというのは、よくわかる。じゃあ大切な「いのち」に順位ってあるのかな。順位があるとすれば、人間の「いのち」は生き物の中で何番目だろう。赤ちゃんの「いのち」とお年寄りの「いのち」は、どっちが大切なんだろう……。

うーん、むずかしい。ぼくたちオトナでも、「これが正解ですよ」と、すぐには答えられません。

そんな「いのち」について、小学生や中学生が作文を書くなんて……「無理無理無理っ」と言いたくなる？

でも、じつは、「いのち」についての問いかけに一つきりの正解なんてありません。クイズみたいに○と×をあさり決めることなんて、できない。だから、むずかしくて、おもしろい。宝探しと同じです。宝物はすぐに見つかることまらない。ワクワク、ドキドキしながら旅を続けたからこそ、最後に見つけた宝物は光り輝くのです。この文集に収められた三十編の作文は、すべて、「いのち」という宝物を探す物語です。「いのち」についての自分だけの答えを見つける旅の記録です。みんな、すごくいい旅をしてくれました。言葉という地図を頼りに、ときには家族や友だちや学校の先生の助けを借りながら、でも自分の足で一歩ずつ一歩ずつ、「いのち」に近づいていったのです。

入賞おめでとう。

でも、その前に、ステキな宝探しの旅を読ませてくれて、ほんとうにありがとう。

そして、ご縁あってこの文集を手にとった小中学生の皆さん、いかがですか？「いのち」という宝探しの旅に、きみも出てみませんか？その旅の物語を、ぜひ読ませてください。

選考委員 菊池 省三
選考委員 重松 清
選考委員 津村 記久子
表紙・カットイラスト 永田 萌

2023年度 小・中学生

「いのち」の作文コンクール作品集

2024(令和6)年1月発行

編集・発行 公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団
〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目4番24号